武装神姫《ＢＡＴＴＬＥＣＨＲＯＮＩＣＬＥ》

月影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武装神姫《ＢＡＴＴＬＥＣＨＲＯＮＩＣＬＥ》

【Ｎコード】

Ｎ１１９５Ｚ

【作者名】

月影

【あらすじ】

友との再会、神姫との出会い、学園での生活。そして、戦い――

これは一人の少年とそのパートナーたる神姫、そして彼を取り巻く人々が織り成す、神姫と共に生きる町と呼ばれる場所で紡いぐ物語

※武装神姫の二次創作です。ＰＳＰバトルマスターズ２を元に書き

ますが、ゲームの内容が内容なので細かいストーリーはほぼオリジナルです。話のネタが思いつき次第、執筆・投稿という形をとるので更新は不定期となります。また原作に出てくるキャラも何人か出てきますが、キャラの性格において、読者の皆さんのイメージとの多少の相違が出てくるかもしれませんがご了承下さい

第０話『神姫と共に生きる町』（前書き）

この物語はフィクションです。団体、地域名は架空のものとなります。

第０話『神姫と共に生きる町』

西暦２０３６年。第三次世界大戦もなく、宇宙人の襲来も無かった、現代から繋がる当たり前の未来。その世界ではロボットが当たり前の様に存在し、様々な世界で活躍していた。

神姫、それは全長１５ｃｍのフィギュアロボ、“心と感情”を持ち、最も人々の近くにいる存在。多彩な道具・機構に換装し、オーナーを補佐するパートナー。

その神姫に人々は思い思いの武装を装備させ戦わせた。名誉の為、強さの証明の為、あるいはただ勝利の為に

オーナーに従い、武装し戦いに赴く彼女らを人々は『武装神姫』と呼ぶ

まず目に飛び込んでくるのは神姫をつれて歩くたくさんの人々。神姫センターでは毎日の様に公式バトルが行われ、参加者と観客で大賑わいだ。更に魚屋を覗いてみれば猫型神姫のマオチャオが頭に捻り鉢巻を巻いて店主と一緒に店番をしていたり、公園で行われているストリートライブに耳を傾ければギター型神姫ベイビーラズがマスターと一緒にギターを弾き鳴らしている。学校では生徒と一緒に神姫が当たり前の様に授業に参加しており、それどころか勉強を教える教師の傍らにも教師を補佐するかの様に神姫が居る。その場所に一歩足を踏み入れれば神姫を見かけない事など無い、と言うぐらいここは至る処に神姫が存在している。何時しか人々はこの場所

をこう呼んでいた“神姫と共に生きる町、神妃(かみひ)市”と

まだ雪が降り積もる１２月、神妃市立神妃高等学校。物語はここから始まる――

第１話『再会と始まりは粉雪が降り積もる場所で』

少年は緊張の面持ちで待っていた。茶髪のミドルヘアーにほんの少しだけ鋭い目つきをした少年が厚めのフード付きのコートに身を包み、その手に一枚の紙を持ってじっとその時を待っている。少年だけではない、周りに自分と同じ様にその時を待つ少年少女で溢れ返っている。少年と同じ様に緊張の面持ちをした者も居れば、自分は大丈夫だと自信に満ちた者も居り、それとは逆に不安一杯なのか目を強く瞑り手を組んで祈ってる者も居る。そんな中遂にその時はやってきた。係りの人が少年少女たちの前に立ててあるボードに一枚の大きな紙を貼り付ける。そこにはたくさんの番号が順番に書かれており、時より飛んでいる番号もある。皆が目を凝らして自分の番号を探し始め、やがてある者は歓喜に包まれ、またある者は落胆に沈む。

そしてこの少年も同じ様に数字を探す自分の番号は０１２４。が、０１２２の次に表示されていたのは０１２５。自分の数字は存在しない。けれど少年は他の人と同じ様に落胆には沈まない。逆に少しホッとする、何故ならこの用紙に自分の番号が載っていようものなら負けなのだ。やがて、係りの人が空いているスペースに一枚目の半分しかないサイズの用紙を張り出し、少年はそちらに目を向ける。そこには僅か１０個の番号しか載っておらず、番号の並ぶ順番もバラバラだ

「０１２４、０１２４――」

緊張の余り、口に出しながらその番号を探す少年、やがて――

「……あった」

上から5番目に表示されている１２４の番号、もう一度見比べてみるが間違いない

「ーーーっし！」

感極まった表情で思わずガッツポーズをした。自分は勝ったのだと、両親との勝負に、目的は達せられた。と、同時にホッとしたのか体から力が抜け思わずフゥーっと息を吐いてしまった。

「よっしゃあぁーーーー！！！」

と、何処からとも無く響いてくる一際大きな歓声

「やったぜ！　たま子、合格だ合格！！」

「流っ石、ご主人様、すごいのですぅ～」

「おうよ、俺様にかかれば楽勝楽勝！」

「楽勝なのですぅ～」

と、そこには自分のパートナーであろうマオチャオ型の神姫と共に喜びまくっている一人の少年。こちらは黒のツンツンヘアーに人懐っこそうな目をしている。余りに騒ぎすぎなのか落第してしまった人達が恨めしそうな視線を向け始めるが、一人と一機はそれに気づかず「神妃高校、キタ～～～～！」と未だバカみたい騒ぎまくっている。少年もそんな彼らの様子を唖然と眺めていたが、その視線に気づいたのか彼と目が合い、やがて自分の方に近づいてくる

「んん〜〜？」

「ご主人様？」

「え、えっと……俺が、何、か？」

自分の顔をジッと覗き込んでいる相手に少し引き気味になりながらも、訊ねるとやがて彼は少年から顔を離し

「もしかして……お前、拓哉（たくや）か？」

「えっ？　まさか……甚平（じんぺい）！」

ここは、神妃市の神姫センター。神姫センターとは公式バトルと呼ばれる小規模の大会に使われる会場を始め、神姫協会直営のオフィシャルショップやカスタムエンジニアと呼ばれる人々によって改良されたパーツを取り扱うプレミアムショップ、その他にも談話スペースや軽飲食フロア等が存在している神姫と共に暮す人なら誰もが利用していると言っても過言では無い神姫関連全般の管理、運用を行う神姫協会が運営する大型施設だ

「いや〜、懐かしいぜ。まさかあんな所で旧友と再会するなんてよ」

「まさかは俺の台詞だ。小学校を卒業した後、遠くの町に引っ越し

たってあいつから聞いたけど、神妃市に住んでたんだな。更に同じ高校を受験してたなんて偶然ってのは恐ろしいな」

この二人の少年。名は天音拓哉と大木戸甚平、小学校時代の幼馴染であったこの二人も今は神妃高校から神姫センターに移動し、軽飲食フロアでハンバーガーを食べている

「この町に住んでるなら、いや、住んで無くても神姫のマスターやってるなら高校の第一志望は殆ど神妃高校になるからなぁ。と、紹介が遅れちまったな。こいつはたま子、判ってるとは思うが俺の神姫さ。んで、こっちが天音拓哉、前に言ってた小学校時代の親友だ」

「たま子ですぅ〜、ふつつつか者ではありますがよろしくお願いしますですぅ〜」

そこで思い出した様に甚平がたま子と拓哉にそれぞれの紹介をするとたま子も自分自身の自己紹介を始める。言葉の単語をを一つ間違えているが……

「ん、こちらこそよろしくな」

「で？」

拓哉もコーラを一口飲んだ後に言葉を返すと、甚平が周りをキョロキョロと見渡す

「で？　てのは？」

「とぼけるなよ。拓哉も神妃高校受けたって事は神姫やってるんだろ？　どこに居るんだ？　お前の神姫は」

甚平が期待に満ちた表情で訊ねてきたが、拓哉それに「あ～」っと少し言いにくそうな反応を見せると

「スマン、神姫は居ないんだ。そもそもマスター登録すらしていない」

「はぁっ！？　マスターじゃないってのに神妃高校を受験したって事か？」

先に甚平が言ったとおり、神妃高校はその独自の教育システムから神姫のマスターをやっている学生なら誰もが第一志望にする高校で、しかも同市に建っている神妃学院大学へのエスカレーター方式の学校だ、つまりそれだけ受験の競争率が高い。一般入試ならば低くても倍率１０倍は堅く、二人が受けた推薦入試でも倍率４倍はある超難関校なのだ。そしてその独自の教育システムも神姫が居なければ意味を成さない。神姫が居なくても授業は問題無く受けれるがマスターで無い人間ならば諦めて他の高校を受験するのが普通だ

「どちらかと言うと神妃高校を受けたのは神姫を始める為、更に言えば神妃市に住む為だったんだ」

神姫は確かに日本全国で一大ブームを巻き起こしており、神姫のマスターになる為に日本にやってきたと言う外国人も居る。けれど、拓哉の住んでいた町は例外の一つだった。

「俺の住んでる町ってものすごい田舎町でさ。神姫センターはおろか、協会公認のホビーショップすらないんだ」

神姫と言うのは何処にでも売っている訳では無い。協会直営のオ

フィシャルショップか、協会の方で神姫を取り扱う事を許可された協会公認のホビーショップでしか見つからない。そして拓哉の住んでいる地域はそれがどちらも無かった。つまり、日本の中で数少ない神姫が盛んでない町、と言うことだった

「でも、俺の親父は役場に勤めているから引っ越す訳にもいかない。かと言って神姫の事も諦めたくない。だから――」

「神妃高校に入学して一人暮らしを、って事か」

顎に手を当てながら拓哉の言葉に続く甚平。確かにその理由なら納得だ

「まぁ、最初は親も反対したてたんだ。学費もそうだけど生活費仕送りの関係もあるし」

神姫と言うのはおもちゃと言うよりは既に小人に近い存在だ。とは言え、神姫がおもちゃである事に変わりは無い。拓哉の言っている事は「流行のおもちゃで遊びたいから一人暮らしをする」と言ってるのと同義。確かに親がそう簡単に許すはずも無い、ましてや神妃高校は大学へのエスカレーター式、子供のあおもちゃの為に7年分の学費と生活費を仕送る。余程、神姫好きな親で無い限りまず認めない

「話し合いの末、父さんは二つの条件を出してきた。一つは神妃高校の推薦入学、しかも第一種奨学金による学費の免除付きで合格する事。二つ目、神姫はあくまで自分の力で手に入れる事、この二つを飲むなら神妃市での一人暮らしを認める、ってね」

「第一種奨学金による学費免除って、全受験者の中で上位5名しか

受けれない制度じゃねぇか……」

神妃高校、及び神妃学院大学には奨学金制度が設けられており第一種と二種に分かれている。二種が大学卒業後に返済しなければならないのに対し、第一種は返済不要の奨学金。けれど、これは誰もが受けれる制度ではない。第二種は一般合格者の上位５名と推薦合格者の上位１０名が受けられ、その中でも更に推薦合格の上位５名に入った人間が第一種も選ぶ事が出来る

「で、どうだったんだ結果の方は？」

「推薦合格第５位」

「も、ものすごくギリギリですぅ……」

「全くだ。中学の三年間、この条件の達成に全力を尽くしてきたってのにそれでもギリギリだったんだ……如何にこの高校が超難関校と呼ばれたか良く判ったよ」

我ながら良くがんばったな、と拓哉は少し遠い目をしていたがふと思い出した様に

「そういや、甚平の方こそどうだったんだよ？　合格者上位十名が載っていた用紙が張り出された後に大騒ぎしてた訳だし」

「俺か？　俺は確か……」

「ご主人様の番号は一番上に載ってたのです～」

「一番上、って事は主席合格かよ……」

まぁ、甚平なら納得出来なくも無い。この底抜けに明るい幼馴染、普段の見た目に反し、実は頭を使う事に関しては超が付く天才だ。俺と甚平、そして小早川千歳と言うもう一人の幼馴染の三人でよくテストの見せあっこをしていたが甚平は殆ど満点ばかり取っており、時より1，2問落とすもそれもうっかりミス、ちょいミスと言うレベルだ

「まぁ、主席だろうが5位だろうが学費免除には変わりないんだし、よかったじゃねぇか。これで親の口をあかしてやれるってもんだろ？」

「ご主人様ぁ～、それは違いますぅ。口を明かすじゃなくて、目を明かすですぅ～」

「おおっと、こりゃ一本取られちまったな。アハハハハ」

「アハハハですぅ～」

「鼻をあかす……な」

ホント、人は見かけによらないものだ

第3話『転機の約束』

「っと、そうだ。すっかり忘れてた」

ポテトを食べていた甚平が突然、テーブルに備え付けられていた小型ディスプレイのスイッチを入れる。そこに映し出されたのは、廃墟。そしてそこでは二体の神姫、セイレーン型のエウクランテがバトルをしていた

「今日はエウクランテクイーン杯をやってるんだ。丁度、決勝戦みたいだな」

二人と一機はそのままディスプレイに釘付けになる。片方がエウクランテ型の標準武装クローのゼピュロスでラッシュをかけているのをもう片方が大剣で防いでいる。やがて、大剣を持った方がバックステップで距離をとったかと思うとそのままバーニアを使い急上昇。相手の方がクローをデータ化し収納すると今度はビームランチャーボレアスを取り出し撃つも、それも避けられた。やがて、宙に居る方は相手の真上に来ると今度は大剣を振り上げ落下。相手もそれを受けるべく。ダブルナイフのエウロスをクロスさせて受け止めようとする

「……ダメだな」

拓哉がそう呟いた瞬間、落下してきた方が剣を振り下ろし、相手が受け止めるも防いだ方は防御を破られ地面に叩きつけられた。何とか立ち上がろうとするも、やがてそのまま地面に伏し、試合終了のブザーが鳴る

「唯でさえ重い一撃を持った大剣、しかも重力が乗せられた一撃だ。真っ向から防いだのはマスターの判断ミスだ」

「ほ～、じゃあ拓哉だったらどうする？」

「そうだな……相手が振り下ろす直前を見極めて抜き胴で一撃当ててから追撃、って所だな」

「いやいや拓哉じゃねぇんだから、そんな事は剣道素人じゃできねーっての」

そう、この言葉の通り、拓哉は中学時代剣道部に所属、段級位一級持ちで全国大会で優勝した事もある。特に剣道が好きという訳では無いが通っていた中学が剣道の強豪校で拓哉も部活での内申を稼ぐ為に所属し稽古に明け暮れていた

「それに多少は応用できるかもしれないけど、神姫バトルと剣道は違うからな。そこは覚えておいた方がいいぜ。と、大会も終わった事だし今度はオフィシャルショップにでも行って見るか？俺のねーちゃん、そこの店長なんだ」

そう言って、ディスプレイを消すと二人と一機は席を発ち、バーガーショップを後にした

オフィシャルショップ、神姫協会が直営する神姫専門店でありその品揃えもホビーショップよりずっといい。基本は神姫センターなどの神姫の関連施設にしかない店だ。

「姉ちゃん！」

「野乃姉、こんにちわですぅ」

「あら、甚平、たま子ちゃん、いらっしゃい。受験の方はどうだった？　って、あら、そちらの子は？」

そこで店員のエプロンをつけ、黒い腰まで伸ばしたロングヘアーに優しそうな目に眼鏡を掛けた女性が棚の傍にしゃがみ込み、商品の在庫チェックを行っていたが甚平が声をかけると同時に立ち上がりながらこちらを振り向き、近づいてきた。大木戸野乃香、甚平の姉で拓哉達三人が遊ぶ時の保護者的位置に居た女性である

「受験はバッチリ！　それにより――」

「お久しぶりです。野乃香さん」

「その声……もしかして拓哉君？　懐かしいわねぇ、元気にしてた？」

「ええ、お蔭様で」

「もう、固いわよ拓哉君。昔みたいに野乃姉って呼んでもいいのよ？」

「いや、流石にそれは……」

小学生ならいざ知らず、中学生（しかももうじき高校生）にまでなってその呼び方は流石に恥ずかしかった

「ふふ、冗談よ。そんな事より拓哉君はどうして此処に？」

「拓哉も神妃校受けてたんだよ。そんで合格発表会場で出くわしたんだ」

「そうだったの、それじゃ拓哉君も神姫をやっている訳ね」

「いえ、実は違うんです――」

拓哉が自分の両親との約束の話を終えると野乃香さんは目を伏せたまま考え始め

「しっかし、拓哉の両親も厳しいよな～。神姫をやりたいなら学費免除でで合格しろなんて厳しすぎだろ」

「きっと……」

そこで野乃香さんはどこか悟った様な目で二人を見ながら口を開いた

「拓哉君の両親は意地悪でそんな条件を出したんじゃないと思うわ。神姫は確かにおもちゃよ。でも、彼女達にはちゃんと意思や感情がある。つまり神姫のマスターになるって事は動物を飼うのと同義。そこにはマスターとしての責任が生じるわ。拓哉君の神姫への情熱が確たるモノか両親はそれを試す為にそんな条件を出したんじゃないかしら？」

一人暮らしと言うモノがどれだけ大変か、それは大人である親が一番判っていたのだろう。一人暮らしがつらいからと神姫を捨てて親元戻るなんて事は褒められた者ではない。だからこそ、それだけの覚悟があるか試すための条件、そこまで考えてはおらずただ単にお金の都合だとかそんな理由で出したものだと思っていた二人は彼女の言葉に何も言えなくなっていた

「まぁ、でも拓哉君はその条件をしっかり果たしたんでしょ？　だったら胸を張ってお父さんとお母さんに報告しなさい。きっと今度は快く認めてくれるはずよ？」

「はい……」

「さてと、となるとこれからは拓哉君もここのお得意様になる訳ね。知り合いよしみでサービスするわよ、気持ちだけ」

「気持ちだけよ！？」

姉の言葉に甚平がツッコミを入れ、場の空気が明るくなった所で店の自動ドアが開き一人の少女が入ってきた。眠たそう、と言うよりは儚げな目つきをし、背中まで伸びだ茶髪をみつ編みにしてそれを肩から背中では無く前の方に下ろしコートに親指だけが分れた手袋、口元を隠すぐらいのモコモコのマフラーを巻いている。

「……こんにちわ」

その少女は店内をきょろきょろ見渡し、こちらの姿を見つけると近づいてきて軽く会釈しながら静かに口を開いた

「遥ちゃん、いらっしゃい。今日も神姫を見に来たの？」

顔馴染みなのか、野乃香も親しそうに声をかけると遥とよばれた少女は無言で頷いた。かと、思うと拓哉の姿を見て軽く首を傾げと、今度は甚平が

「天音拓哉って言って俺の小学時代の親友だよ。拓哉、こっちは――」

「志筑遥、よろしく……」

「あ、うん。よろしく、な」

物静かだが愛想は悪くないらしく、薄く笑みを浮かべながら簡単に自己紹介を済ませると遥はそのまま神姫素体の並ぶ棚に歩いていった

「あの子もこの街の子なんだけど、拓哉君と同じで自分の神姫が居ないの。どうやら家の都合らしくてね。でも、よほど神姫が好きみたいでこうしてよく此処にきては神姫を眺めているのよ」

「そうなんですか」

「と、そうだわ。甚平、せっかく来たんだしたま子の定期チェックしていく？」

「そうだな、そんじゃお願いするわ」

「お願いするわ、ですぅ」

甚平からたま子を預かると野乃香は店の奥の方に引っ込んだ

「たま子、どこか悪いのか？」

「そんな訳じゃないさ。自分の大事な相棒なんだ、体調に気を使うのもマスターの勤めってもんだろ？　人間で言う、健康診断みたいなもんさ。さて、俺はちょっと武装の方を覗いてくるから拓哉も好きに見て回ってくれ」

そういい残し、甚平もその場を離れていった。拓哉は手持ち無沙汰にしていたが、やがて遥の隣に立つと

「毎日、此処に来ているんだって？」

「うん……」

「そっか……俺は此処に来るの、ってか神姫を生で見る事自体、初めてなんだ」

「……そうなの？」

「ああ、俺の住んでるとこ、神姫が全然盛んじゃなくてな。俺もまだ持ってないんだ、自分の神姫」

すると、遥は少し表情を険しくすると

「神姫はモノじゃない……だから、持ってないなんていい方は、違う……」

「そうだったな。ゴメン……」

「……うん」

拓哉の謝罪に満足げに頷くと遥は、再び神姫に目を戻し、拓哉も同じ様に神姫を見つめる。箱の透明のビニールの部分から姿を覗かせる神姫はこれだけを見ればただの人形にしか見えないが、バトルや様々な所で笑ったり、怒ったり人と同じ様に動いている姿を見た二人には、目の前の神姫達はまるで眠っている様に見えた。まだ見ぬ自分のマスターとの出会いを心待ちにしながら

「それじゃ、俺は帰るよ。帰って必要書類も書かないといけないし」

「……それじゃ」

「おう、そんじゃまたな。っと、その前に拓哉、携帯もってるか？せっかくだし番号とアドレス交換しとこうぜ」

「あ……わたしも、いい？」

「当然！」

あれから、三人は夕方までオフィシャルショップで神姫を見たり野乃香さんとお話をしたりしてもう既に夕方になっていた。拓哉はそろそろ帰宅するべく、駅に向かい甚平と遥の二人はそのお見送りにきていた。そんな時、陣平がそんな提案をしたので三人はそれぞれ携帯を取り出すが

「甚平、お前の携帯って少し変わった形だな。どこのメーカーだそれ？」

二人が普通の携帯なのに対し、陣平の携帯は横の二つの辺の長さが同じでない縦に引き伸ばした六角形の様な形をしており、ボタンの付いている方が白く、ディスプレイの方は緑色をしている。拓哉が尋ねると甚平は待っていましたとばかりに

「ふっふっふっ。良くぞ聞いてくた！　何を隠そう、これはなんと――」

「バトルフォン、神姫マスターが持つ携帯で、神姫マスターの証……」

「は、遥ちゃん、俺の台詞取らないでくれる……」

まるで水戸黄門の印籠の様に携帯バトルフォンを拓哉の前に突き出しながら甚平の言葉を遮り、遥が手短に説明すると甚平はそのポーズのまま、目を遥の方に向けるも遥はその視線を無視して拓哉と番号を交換する

「……甚平も」

「お、おう……」

「神姫のマスターはみんなこれを持っているのか？」

「うー、たぶん全員って訳じゃないと思おうぜ。機種変メンドイとかって理由で従来のＩＣチップカードのままの奴もいるし。ただ、

バトルフォンには神姫マスターにとって便利なアプリが勢ぞろいだし、これから神姫を始めるなら断然こっちにした方がいいと思うぜ」

「なるほど、覚えとくよ。さて……そんじゃ改めて、またな二人とも」

「おう！」

「……また」

拓哉が軽く手を挙げて言うと、甚平は大きく、遥は小さく手を振って応え、拓哉は駅の中に戻っていった

「ふぅ……」

そしてその日の晩、拓哉は必要な書類の準備を終えてベッドの上に倒れこんだ。あの後、親に事の次第を告げると、最初は驚いていたが野乃香の言うとおり今までの事がウソの様に両親は自分の一人暮らしを認め、明日からは家事や料理の特訓を始めるそうだ。後は明日書類を投函すれば全て完了だ。とは言え、今の時期はまだまだ受験シーズン真っ盛り。それから一足先に解放された拓哉は残りの中学生活何して過ごすか考えていると突然、携帯に着信が入った。差出人は甚平からだ、内容――

『よう！　新年の予定ってもう決まってるか？　決まってねぇなら3日に神姫タワーで新春神姫祭りがあるんだけど遥ちゃんも誘って一緒にいかねぇか？』

と言う内容だった

「3日、か……」

拓哉はカレンダーに目を向ける。3日なら祖父母とかの知り合いの家めぐりも終わってるし大丈夫そうだと判断すると、拓哉は了承の返事を返し、携帯を置いた。このなんて事無い約束が拓哉にとって大きな出来事になるとは、まだ知らずに――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1195z/

武装神姫《ＢＡＴＴＬＥＣＨＲＯＮＩＣＬＥ》

2011年12月19日00時49分発行